

高退教通信

- 2014年 7月号(2014・7・1発行) -

鹿児島県高等学校退職教職員会

事務局 県高教組内

鹿児島市山下町4-18 《099-225-1414》

発行責任者 長井 玄龍

編集責任者 永田 琢朗

2014年度・高退教定期総会・懇親会報告

6月28日(土)

高退教会長 長井 玄龍



6月28日(土) ジェイドガーデンで、約60人が参加して、10時から12時30分まであいさつ、講演、総会議案審議、引き続き午後2時30分まで懇親会を行いました。

来賓あいさつ

向井高教組委員長

野呂先生が退任され、新委員長に向井先生が就任されました。集団的行使容認反対、川内原発再稼働反対の緊急中央集会に対応していること。土曜日に学校活動ができる法律が成立し、市内の進学校などで、すでに土曜日の授業などを含む行事が行われ、週休二日制が形骸化されていること、教科書に政府見解が記述されること、英語の授業は、日本語は一切使わないで進めようとの動きがあること、授業料無償化が所得によって年収910万円以上の所得のある家の生徒は授業料を払うことになったり、新1年生からの適用で、鹿児島市内T進学校は約半数が、指宿のY高校は5人強の生徒が授業料を払うことになるらしいこと、教職員の賃金カットが今年も勧告されるような状況であることなど、教育現場における格差拡大や厳しい現状が報告されました。

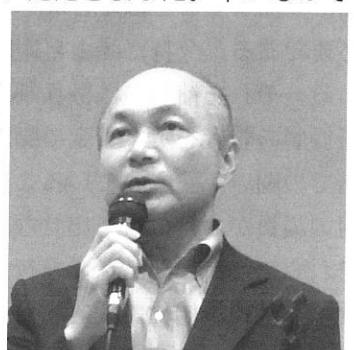
鹿児島市議 森山清美さん(社民党・鹿教組)

鹿児島市議会においても集団的自衛権行使容認反対で頑張っている。「戦後日本は戦争で殺しません殺されもせず68年続いてきた。厳しい中での

生易しい歴史ではない、今後もその努力を積み重ねるべきだ」と言う元自民党幹事長古賀誠氏の発言を引きながら、今の異常ともいえる安倍内閣の暴走に歯止めをかけようと、連帯のあいさつをされました。
福司山宣介県議(社民党)



午後から来会され、交流会冒頭のあいさつの後、最後までお付き合いいただきました。早いもので2015年4月には2期目の選挙が行われます。県議会では社民党1議席の孤軍奮闘で頑張っています。この貴重な議席を失うことはできません。会員皆様の支持をよろしくお願いします。



講演

講師 杉原洋さん（元南日本新聞社記者・元鹿児島大学特任教授）

演題「限定容認」はアリの一穴一集団的自衛権行使を許すなー



杉原先生は闘う知識人です(チョット古い言い方ですが)。決して書斎の肘掛椅子で理屈をこねて、活動はしない人ではありません。最近でも6月20日(金)にみなと大通り公園で行われた、集団的自衛権行使容認反対の集会でも壇上であいさつされ、デモ行進の先頭で横断幕を手に取って行進され、また川内原発再稼働反対運動の県全体のまとめ役、先導的役割を果たされています。新聞社在職中は南日本新聞社労組の委員長もされています。

講演要旨

集団的自衛権容認の与党協議の経過を時系列で紹介し、蜜室、国民不在の議論が進められており、7月1日には与党合意ができ即閣議決定が行われるであろう。しかし、それで即自衛隊が海外で戦闘に参加することはできない。自衛隊法の改正が必要である。今特に陸上自衛隊で退職者が増えている。それを補うには徴兵制か、米国のように低所得層の若者を奨学資金で騙すしかない。法案段階での闘いが残されていること。与党の中でも反対の議員がおり、声を出せない状況にあるから、それらの議員に要請活動を行うこと、また世論は安倍総理の情緒に訴える提案の底が見え、世論調査の結果が行使容認反対の意見が5月48%6月55%、と増え、容認支持が39%から34%に減っていること、などから大衆行動での阻止行動ができるので

はないかなど今後のとりくみについて示唆された。

また、憲法9条は主語が「日本国民は」から始まっており、「日本国民は…戦争で、武力で…国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」②この目的を達成するため(日本国民は)戦力を保持しない。国の交戦権は認めないとある。この事を再確認して、集団的自衛権利認の阻止にとりくんで欲しい、と訴えられました。

最後にご自分が社会正義実現の道を進むことへの影響を受けられた「チボ一家の人々」(ロジェ・マルタン・デュ・ガール、仏、1922~1940)を紹介され、主人公が欧州での第1次大戦でフランス・ドイツの戦争を止めさせるために、一人で行動し残念な結末に終わるが、一人であっても最後まで戦争に反対することの大しさを思ってこられたことを話されて締めくくられました。

2014年度定期総会

議長に竹林虎夫先生にお願いして進行しました。

2013年度の経過、活動、決算は提案通り承認されました。

2014年度の運動方針に以下の要望がありました。

- 脱原発のとりくみで、800人の会員を擁する高退教の会員で「川内原発運転差し止め訴訟団」に約40名の参加があるのは非常に少ないので、もっと参加者を増やすとりくみを進めて欲しい。
- 今現場は、組合員の減少や多忙化で厳しい状況に置かれている。その状況をいくらかでも軽減するために、各支部で担当者を決め、分会訪問や管理職への対応、学校活動全般のサポート等できることはいか検討して欲しい。

執行部の回答

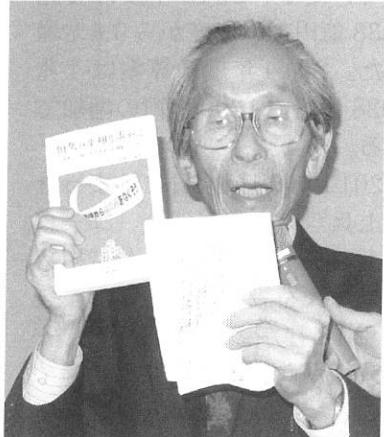
- 執行部としても現職へのサポートが出来ないかはこれまで考えてきたことであり、日退教でそのことへの意見もあるが現実的には難しい問題である。現職組合の皆さんのがどのようなサポートを欲しているのかが分からぬ。こちらの押しつけや自慢話で終わっても現職には迷惑でしょう。高教組本部とも意見交換をして、どうしたらしいのか役員会でも検討させてほしい。

2014年度方針・予算案は総会で議決されました。

2014年度新役員選出

新役員構成は「総会議案書」p16をご覧ください。退任される旧役員の境先生、関先生ご苦労様でした。新役員の小原先生、橋口先生、納先生宜しくお願ひします。

懇親会



午後からの懇親会はいつものことですが、談論風発大変賑やかな会でした。「恒久の平和を求めて」を発刊された上山陸三先生から感謝の言葉と本を購入いただくようお願いがありました。持参した20冊すべて完売できました。

詳細記事はP12参照。（写真上：上山陸三さん）

今年度初めて支部紹介が行われ、各支部からのとりくみの状況や、支部交流会を実施したいなどのあいさつがありました。



長井玄龍会長と川崎洋子さん

今年度の総会・交流会は例年の参加者に加え新しい初めての会員の参加があり、「堅苦しい会だと思っていましたが、楽しい会でした」との感想などが聞かれ、来年は80人をめざそうとの声が上がりました（今年度は54人）。最後に全員で「日教組組合歌」を歌い、今年3月退職の山下悦子先生の音頭で

元気いっぱい「頑張ろう」を三唱し閉会しました。

参加者は次の通りです。来年も大いに交流を深めることができるとと思いますので、多くの会員の参

加をお待ちしています。

（出席者のお名前・敬称略）雨宮敬亮 荒木忠正 岩澤秀子 植村忠久 上山陸三 梅島嘉洋 江田功吉 大久保幸一 納雪子 小原健 柏木英治 神信裕 川崎洋子 上田長司郎 木原清 木原彬成 小杉容健 後藤純一 小蓬原千津留 駒路義明 児美川學 酒匂潔 佐多良大 篠崎大五郎 篠原廣己 図師博隆 関壽夫 平鉄臣 竹之内秀晴 竹林虎夫 玉利千佐子 德永正子 戸畠和己 泊勝哉 長井玄龍 永田琢磨 橋口昭二郎 橋野裕明 日高学 福田陽一 別府一春 三浦和元 道岡康良 宗像隆 村田孝男 村山光則 安松良和 山下悦子 山下太吉 山之内卓志 豊純輝 吉永裕子 吉村鐵之助 米森明（54人）

高退教年会費納入のお願い

- 年会費を納入していただき有難うございます。
- 未納の会員に再度振り込み用紙を送りましたので年会費(2000円)納入をお願いします。
- 80歳以上、高教組組合員は会費が免除になります。振込用紙が同封されていても納入しないでください。
- 2013年度会費納入振込用紙にお名前の記載がない方が2名ございました。会費を納入したのに今回振込用紙が同封されていましたら、高教組書記局にその旨ご連絡ください。
- 本状と行き違いで納入されていましたらご容赦ください。
- 手違いなどあるかと思いますので、ご不明な点がございましたら、書記局か共助会の永田にご連絡ください。



2014年度 第43回日退教定期総会

2014年6月10日(火) 日教組会館(東京)

報告 長井 玄龍



昨年9月、日退教結成40周年記念行事があり、たまたま臨席した、香川退教協の大林会長さんが92歳だという事に驚いて、すでに半年が過ぎた。今年の総会にも元気で出席され、香川での「育鵬社」の教科書選択阻止のとりくみを報告された。私は、高退教育青年部と思っていたが、大林先生の存在から考えると幼年部かも知れない。

さて、前回の総会以来この1年の日本の政治経済の変動はめまぐるしい。鹿児島高退教の総会議案に永田事務局長がこの間の情勢及び高退教のとりくみについて報告されているので、是非ご覧いただきたい。

今年度の日退教総会の大きな課題は、安倍自民党が集団的自衛権の行使容認の閣議決定で、日本が何時でも戦争や紛争に参戦できることを決定しようという、日本の平和と安全を根底から変えようとしていることだ。憲法に基づいて法律や条例がつくられ政治や行政が進められるが、それには憲法の解釈は必要である。しかし、集団的自衛権の行使は、憲法9条をどう解釈しようとも、無理な事である。白を黒としなければならないので、そこに様々な矛盾や辯證の合わない事が生じ、まともな理屈では対応できない。そこでわずか20人足らずの閣僚で決定し、日本が戦後これまで積み上げてきた平和国家を根底から覆そうとしている。

軍事大国化への道、いつでも戦争ができる準備は進んでいる。

防衛予算は、2012年度は4兆7138円で10年連続して減少していたが、2013年度は4兆7538億円で前年度から0.8%増えた。2014年度予算案は4兆8928億円で1390億円の増加である。

2014年6月16日に始まった陸上兵器の国際展示会「ユーロサトリ」(パリ)に日本が初めてブースを設けた。防衛産業を担う13社が参加している。安倍政権が武器輸出三原則を緩めたことで、海外でのビジネスチャンスが生まれたからである。(「朝日」14・6・17)

私は戦後生まれで、幸いに私も家族も、もちろん日本国民も

戦災に遭うことはなかった。平和憲法のもとであった事にもよるが、戦後先輩教師たちが「教え子を戦場に送らない」の決意のもとに平和教育や平和運動を続けてこられた結果であると思う。教育現場からは離れた高退教の会員であるが、私たちにもできることははあるだろうから、頑張らねばと思うことであった。

さらに喫緊の課題は、福島の放射能汚染、辺野古新米軍基地建設、川内原発再稼働、消費税率増額、高齢者医療介護制度などさまざまにある。

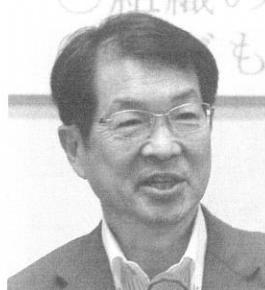
日退教の西澤清会長(東京高退教)はあいさつで、高退教会員が「表に出よう、社会に参加しよう、街に出よう」と訴えられた。集会に、デモに、署名に参加することが日本の平和への一歩になる。鹿児島でも「戦争をさせない1000人委員会」が発足した。この後、各地区でも同様の組織が結成される事に成っている。

今この悲惨な政治状況を生んだ最大の原因は、先の衆・参国議員選挙で自民党の圧勝を許したことである。たかが選挙、されど選挙。次期国政選挙ではこれを覆す状況をぜひ実現させたい。

日退教がホームページを開設しました「日退教」で開くと、鹿児島高退教のページもあり、「高退教通信」も掲載されています。ご覧ください。

高教組委員長退任のあいさつ

野呂 正和



「四十にして惑わず」。
とんでもない。私は四十にして惑い、五十に彷徨し、六十のして人のありがたさを知る。

過ぎてしまえばたかが38年、学校に28年、本部に10年、責任の大きさと自分の不甲斐なさと波乱に満ちた本部の10年間、特に5年間の委員長時代は、諸先輩委員長の輝かしい歴史に押しつぶされそうでした。2010年に高教組60周年に巡り合わせましたが、記念誌のデータ整理をすればするほど、写真の整理をすればするほど、過去の栄光と活動の偉大さに気づかされました。

特に、永野善男先生の公務災害裁判の闘いは、ちょうど教師になった1976年の急逝だったことになります。16年の裁判闘争と宮崎高裁での勝訴

時計の針を後戻りさせてはならない

委員長就任のあいさつ 向井尊磨



7月1日の朝にこの原稿を書いています。今日の午後には、「集団的自衛権の行使容認」を閣議決定しようとしています。

首相は、国境周辺の島を「我が国固有の領土」と強弁し、靖国神社に参拝し、「従軍慰安婦」や「南京大虐殺」を否定する人たちを側近にして、「河野談話」を検証・否定して、他の国の反論に乗じて人心を煽り・操り、静かに（「騒々しく」かな？）この国を変えようとしています。「茶色の朝」を思い起こします。

川内原発再稼働に関しては、知事は「10～30キロ圏内の要介護者の避難計画は現実的でない」と発言し、まさしく、事故が起こった時には「置き去り」もあり得ることを表明したようなものです。絶対に再稼働を許してはなりません。

集団的自衛権の行使容認や原発の再稼働などを

は、予測できない公務上の不利益に高教組が組織を上げて取り組んだ結果です。その共助の成果を実感する闘いでした。

委員長を退任して、なお役割をもらいました。2011年に脳梗塞を起こして自宅療養中の蔵満さんの公務災害を担当します。また、先日には県護憲平和フォーラムの事務局長に就任することになりました。1年間不在だったポストです。私の力量はわかった上での就任です。原発、基地 A憲法。安倍内閣の暴走との闘いです。ナチスがそうであったように安倍晋三の言論はまやかしています。憲法の立憲主義を踏み外しています。

いずれも高教組のこれまでとこれからの運動方針になっている課題です。憲法の平和的生存権を実現するために、皆さんの協力をいただいてとりくんでいきます。

高退教もしばらくは中途半端になりますが、平和と脱原発社会作りに事務局長として、高教組の経験を生かしていきます。

求めているのは、いったい誰なのでしょう。それによってお金が儲かる人たちがいるのです。「武器輸出三原則」の見直しを迫る産業界の人は、間違なくその一人でしょう。お金で、平和や、安心して暮らせる環境を壊してはいけません。

私は、この4月から高教組の委員長というとても大切な役に就きましたが、十分にその役割を果たせるか自信はありません。6月28日の高退教総会で、「先輩の皆さんのが背中を追いかけながら走っていきます」と述べさせてもらいました。先輩の皆さんにも、高教組組合員にも、恥じないよう努めていきたいと決心しています。

子どもたちには、心豊かに賢く成長し、次代を担う主権者に育ってもらいたい。苦しんでいる子どもたちには、寄り添い、共に苦しむ中から、夢をつかんでもらいたい。彼らが「銃をとることにならない社会」をつくっていきたい。こういうことに努めていきたいと考えています。

憲法第9条をノーベル平和賞に推薦されていると報じられています。私も、受賞を心から望みます。

初めての交流会 近況報告でお互いに元気をもらう

北薩支部交流会を実施 4月26日(土)

報告 平 鉄臣

4月26日(土)、出水市内のホテルで北薩支部交流会を開催し、会員49名中19名が集まった。

始めに、実行委員を代表して内山博道さんから「とにかく集まって語り合おうということで、三人の実行委員で全会員に通知を出した。15人も集まればいいと思ったが、たくさん集まって頂いて嬉しい。

欠席の方々は本当に都合がつかない人たちで、次回は参加したいという返信があった。」という報告があった。次に柏木英治支部長から「4年前に一度支部の会合を持ち、2回目も企画したが、連絡はがき印刷の失敗でできず今回になった。実行委員に感謝したい」とあいさつがあった。また県高退教の副会長である私から、県の活動状況の紹介を兼ねたあいさつをして、その後神田哲男さんの乾杯の音頭で楽しい交流会に入った。

腹も満たされ、アルコールも回ったところで、全員の近況報告。目が、耳が、腰が、脳が……と言う加齢による身体の衰えの報告もあったが、明るい面だけ紹介します。「週3回ほどグラウンドゴルフを組織している」「退職後は、囲碁・映画・菜園・読書の繰り返し」「グラウンドゴルフもあるが、あまりのめり込まないようにしている」「四国88箇所巡りの内70箇所を回った。夫婦でいい会話ができる」「町内会長を7年やっている。女子高に週1回行き、元気をもらっている」「ブラブラしていると、こういう仕事をしないかと誘わ



れる事がある。古稀になってからまで……と言う氣はする」「何度か海外旅行をした。英語の勉強もしている。更に、陶芸・フラダンス・太極拳・ガーデニングと趣味は拡大」「北海道・佐賀・トカラなどに行き、バードウォッチングを楽しむ。安倍や麻生を見ると気分が悪くなるが、鳥は気が晴れる」「退職後3年は再任用。今は粗大ごみ」「飲み方は好きだが、誰とどんな飲み方をするか。組合関係の飲み方が好き」「川内原発付近の地質調査をやっている。修学旅行生相手に平和学習もする」「現役の組合員が少なく現場は大変。土曜授業をするところも出てきた。若い教師が変に一生懸命過ぎる」等々。(メモ帳に記録した分の抜粋)

そして、年2回(歓迎会・忘年会)は集まろう。次回からは、組織的に実行委員会を立ち上げて実施しようといった意見も出され、「日教組組合歌」の齊唱、「団結ガンバロウ」で一応締めくくった。但し若干時間が早かったのでまだ残って語り合う人もいた。私は後ろ髪を引かれる思いで新幹線に飛び乗った。

「教育」「教養」「教壇」

川薩支部総会・懇親会

報告 泊 勝哉

2004年の退職だから高退教会員になって10年経過している。前支部長の吉村鐵之助さんから支部長を引き継いでから5年、定期総会に出席する以外にこれといった支部の活動をしなかった。何かしなければという思いがずっとだったので、総会・

懇親会を開くことにした。

2013年6月10日作成の会員名簿をもとに川薩支部(薩摩川内市・さつま町)会員名簿を作成したところ36名になった。35名全員に案内のはがきをだし、返事は電話でお願いすることにした。

返事をいただいた方は18名で出席が9名、欠席が9名（米田高秋さんは日置支部に転居、中村幸一んと伊達克能さんからは、はがきで返事が届いた。）

本部に連絡を取り、副会長の児美川學さん（薩摩川内市出身）に来ていただいた。

5月15日（木）17:00～19:30会場はJR川内駅近くの川内ホテル

高齢者の集まりということでイス・テーブルとした。会費3,000円。

総会は簡単な経過報告と本部のあいさつで終わり。懇親会では一人ずつ時間制限なしの自己紹介という形で、近況報告やら高退教にかかわる感想・意見などを語りあった。退職後の日常生活にあっては、「教育」＝今日行く所、「教養」＝今日用がある、「教壇」＝今日談笑をするということが大事であるということである。

懇親会の中で次のことが話し合われ、共通了解事項とした。

1. 支部役員…支部長：泊 勝哉（2004）

副支部長：川崎雄二（2009）

会 計：上村洋一（2009）

2. 年1回以上支部総会・懇親会（忘年会、歓迎会等）を開く。



出席者は次の通り。敬称略、（ ）内は退職年。

（写真前列左から） 愛甲警司（2002）

久留須巖（1994） 丸山耕治（1994）

森薦正人（2003） 泊 勝哉（2004）

（写真後列左から） 上村洋一（2009）

石塚克己（2010） 児美川學（2004）

上薦 猛（2006） 川崎雄二（2009）

大隅支部歓迎会は大盛会!!

6月20日（金）



今年も大隅支部の大切な年中行事の一つ、新入会員の「歓迎会」が参加者21人ありました。例年この会と「忘年会」を催し親睦と連帯感を深め、他の活動への活力の源にされています。聞くところによると、高退教本部役員のほかに以前は現職（高教組）の支部役員にも参加の声をかけ現・退の交

報告 図師 博隆

流を図っていた時もあるそうです。

盛山栄弘さん（書記・会計）が出欠届の返信ハガキをもとに作った出席予定者名票と欠席予定者からのメッセージを集約した資料と、会員名簿など準備して受付をされていました。進行係は山口忍さん（書記）が務めました。

安松良和支部長の「あいさつ」

で始まりました。その上で上山陸三さん（今回は、同じ時間帯、鹿児島での“戦争への道を許さない鹿児島県総決起集会”に「呼びかけ人」として参加のため欠席）の新著『恒久平和を求めて—反戦・反核おおすみ平和運動の30年—』を紹介された。これはまさに、彼をリーダーとして高退教大隅支

部の仲間も加わって進めて来た地元市民運動の記録であるとも言えるでしょう。

次に本部役員代理の「あいさつ」のあと、小蓬原千津留さんが音頭をとって「乾杯！」。しばらく飲食懇談の後、新入会員の山下悦子さん（写真左）の「あいさつ」を皮切りに、参加者一人ひとりが、それぞれの近況を座席の順番に報告し、盛り上が



って行きました。

この歓迎会・忘年会で年2回みんなと会えるのが楽しみで元気を貰っている。加齢に伴う病気とのつき合い。趣味を楽しんでる。釣りの話。自家農園・園芸の話など。非常勤の学校との関わり。殊に、海上自衛隊鹿屋基地所属のヘリコプターが低空訓練飛行する時の騒音と墜落事故の不安に悩まされるなど、軍事基地を抱える街ならではの問題提起は胸に響きました。平和

憲法の第九条を解釈変更してないがしろにし、集団的自衛権の行使を容認することでアメリカにすり寄り、日本をまた戦争に巻き込もうと躍起になっている安倍政権への怒りも熱く語られました。今の世の動きを見ると幼い頃見たB29戦闘機の爆撃の恐怖がよみがえってくるということも！次の世代に対してどう責任を果たすべきか？今こそ私たちは突きつけられていると感じました。

最後に、岩元善治さん（音楽）のリードで日教組組合歌を合唱し、その後、坂元睦子副支部長の「閉会のあいさつ」、音頭で「がんばろう」を三唱し、和気あいあいの内に終わりました。

本文に載っていない参加者の名前は次のとおりです。

《順不同・敬称略》 川口正志・林俊一・矢島正史・稻田鴻太郎・福田陽一・行山昭久・高味鈴恵・江並忠典・坂元勝海・辻原敬俊・鈴木 泉・納 雪子・北吉松美・岡師博隆（鹿児島支部）

反戦・反核・平和運動30年を振り返って

連載12回目(最終回)

上山 陸三(元高教組副執行委員長)

いよいよ最終回を迎えた。

私は今回、30周年記念祝賀会の席で、来賓や会員たちから寄せられた祝詞や意見・感想などを紹介するつもりでしたが、本「高退教通信」への連載予定回数を遥かに超えてしまったので、その部分はカットさせて貰うことにする。

そこで、本「通信」を借りて、私が代表として、世話係会を中心に「大隅市民の会」を今日まで運営してきた経験談と心得みたいなものを紹介して、後進の若者たちへの参考に供したいと思う。

一 会員たちの信頼と理解を得ることの必要一

私は代表としてのカリスマ的能力も資質も持ち合わせていない。従って、これを補うため会員たちの信頼と理解を得べく、謙虚で誠実に振舞うことをモットーとしてきた。

いかなる会の運営においても、会員たちの相互理解と信頼がなければならない。また、協力と連帯と助け合いの心がなければならない。私はこれらのこと絶えず念頭に置いてきた。

一目標(目的)と理念及び信念を持つことの必要一

次に、会の運営に当たっては、先ず、目標と理念及び信念を持つことが大事だと思った。

私は1932(昭和7)年の生まれで、その前年の1931年に日本軍(関東軍)の謀略によって引き起こされた満州事変から、日中戦争・太平洋戦争を経て、1945(昭和20)年の敗戦にいたるまで、約15年間を幼・少年期と青年期の初期まで過ごしている。米空軍機による空襲・空爆を体験をし、戦争の恐怖と悲惨を身にしみて知っている。言わば「戦争体験者」である。

この体験から戦争の愚かさと平和の尊さを痛感し、戦争は二度と起こしてはならず、平和を築くことの大切さを後世に語り継ぎ、訴え続けることを使命のように感じてきた。この目標とも言える使命が私を反戦・反核・平和運動へと駆り立ててきたと思う。

—一人命と平和は人生の第一義的な価値—

私は第2次大戦、分けても満州事変に端を発するアジア・太平洋戦争の歴史を学び、この戦争において、中国を始めとする東北・東南アジア諸国の人々が2,000万人以上も殺され、日本でも約310万人が犠牲になっていることを知った。この非人道的で、恐怖すべきことから私は人生の第一義的な価値に「人命と平和」をおくことにした。所属した日教組の組合會議で「人間の命は地球より重し」と言う言葉や「教え子を再び戦場に送らない!」というスローガンに出会い、これらの言葉を金言とし、人命と平和の尊さを訴え、守ることを理念または信念とすることにした。この上記目標と理念および信念を堅持し、貫き通すことによって、「大隅市民の会」の運営に当り、今日まで、同会を持続させることができたよう思う。

—会の運営の難しさ(壁)に直面する—

しかし、代表がいかに気負った目標や信念を持っていても、実際の会の運営となると簡単にはいかない。

結成当初は、反核運動が世界的にも、国内的にも燃え広がっていたため、入会者も一時、100名を突破した。しかし、同運動が下火になると、脱会者が次々に現れ、数年後には半数近くに減り、約10年後には50名程度になってしまった。会員も殆どが60代以

上の高齢者で、それ以下の若者たちが少なくなってしまった。この会員数の減少が、先ず最初の壁だった。

次に困ったことは、集会ごとの人集めだった。集会時の人集めほど難しいものはない。事務局担当が転勤で、何人か交代したために、私がその仕事をせねばならず、集会ごとの案内文はすべて自分で書くことにした。案内文は出来るだけ簡潔に、丁寧に書き、文頭の上の余白の所に、全会員に対し、朱筆で「添え書き」をして、集会参加を呼びかけた。それでも、不安が残るので、更に電話で丁寧に催促した。にも拘らず、不都合を理由に、半數程も集まらないこともあった。私は三名集まれば実施することを覚悟して、いつも集会に臨んだ。人集めに苦労する時は集会前に大抵、世話係会を開き、相談し、打開策を練った。同会では「飲み会」と称する懇親会を必ず開き、親睦を深め、知恵を出し合い、結束して人集めに当たった。以上のような方法が功を奏し、同会発足から約10年後には、会員数も参加者数も、ほぼ50名前後に定着するようになった。

—持続する意志を持つことの必要—

当初、全国的に叢生した草の根市民運動の団体は、数年後には、広島・長崎は別として殆どが消滅してしまった。この状況を見て私たちの間でも継続論と中止論が出た。しかし、世話係会の「飲み会」が力を發揮し継続論が優勢となり、続行することになった。私はこの後押しに力を得て、かねて代表として、「持続する意志」を持つ事の必要を感じてきたので、これをさらに固めることができた。何にしても仕事や活動は持続する意志を持つことが大事のように思う。また、私はたとえ、小さな運動でも「継続は力なり」を信じ、この言葉を思い浮かべ、ひるむ心に鞭打った。

—エゴイズム(利己主義)との闘い—

このような反戦・反核運動は、直接自分の利益には繋がらない。人類の生存と存続のために平和を追求する遠大な運動である。

人間は誰でもエゴ(利己主義)の塊であるが、この運動はエゴを秤にかけたり、エゴの芽を少しでも

出したりしたら、つまり、打算的になれば、実行できない。エゴと闘い、エゴを克服せねばやっていける運動ではない。

凡人の私はエゴに弱いが、平和に反する事件が起きたり、反戦・反核集会が近づいたりすると、俄かに、エゴとの闘いを始め、没我的となり平和運動に集中してきた。

世間で「平和運動は誰かがやってくれるでしょう」とか「誰かにやってもらわねばならない」などと、まるで他人まかせのように言う人がいる。私はこれらの人に対して、「あなたも自ら進んで一緒にやって下さい」と言いたい。なぜなら、平和は他人まかせでは築けないからだ。自ら、進んで守り、勝ち取らねば築けないからである。それは過去の歴史が証明している。

ともあれ、平和運動はエゴイズムを、たとえ一時的にもせよ、没却しなければ出来るものではない。

一マスコミ対策は不可欠一

私はこの運動の最初からマスメディアを利用し、恩恵を蒙った。既述の通り、新聞各社の「よろん」欄へ活動内容を紹介し、また、記者たちに取材・報道して貰った。この二つの宣伝は非常な功を奏した。約5年を経過する頃から、私は集会ごとにその内容と案内文を書き、当地に支社のあるすべての新聞社とテレビ局に取材・報道を依頼した。

案内文は記者たちがネタを求めて集まる市役所の記者クラブへ届けた。毎回、5～6社が取材に駆けつけ、報道してくれた。

このマスコミ報道は私たち会員を励まし、勇気づけたばかりでなく、私たちの運動を世間に知らせるのに大いに役立った。私は取材に来てくれた記者たちに、毎回代表挨拶で感謝の意を表した。

地方における小さな市民運動はマスメディアの力を借りなければ陽の目を見ない。その意味でマスコミ対策は必要不可欠である。

一集会場作成の役割分担について一

私は集会ごとに必要な横断幕の作成、伝車の用意、諸道具の運搬、会場作成など準備作業に世話係だけでは人員が不足するので、他の会員たちに

も援助を依頼した。皆、快く引き受けてくれ、開会時刻より30分くらい前まで、現地に集合し会場作成に当たってくれた。

今、ここに各係りの氏名を長年の労をねぎらい、記録させて貰うことにする。

横断幕作成＝河野達人・有川文人・上山四朗・真島幸則

伝車の用意＝上山洋二

諸道具の運搬＝前田通明・桐原好昭

会場作成＝尾迫信夫・岩元康司・吉留又雄・岩田都詩夫・土橋雄幸・本地博・福田陽一

私事で大変恐縮であるが、上記氏名の中の上山洋二は私の兄(元市議)、四朗は弟(元教員)である。私を含め3人とも、同じ境遇に育ったため、思想的に似通っており反戦・反核・平和運動には当初から関わってきた。私は世話係会を開く時は事前に必ず二人の兄弟に相談することにした。これは公然の秘密のようになっており、係り会員たちは私たちの提案を大抵、受け入れ、賛同してくれた。私は二人の兄弟なくしては30年間に亘り平和運動は続けてこられなかつたと思っている。

たいした兄弟喧嘩をすることも無く、協力しあって長年、平和運動や労働運動を続けてきたためだろうか。会員・仲間たちから「上山三兄弟」という賞賛を込めたニックネームを頂戴している。私たちは素直に、感謝してこの名称をお受けしている。皆さんのお陰である。

一他市民団体との連帯・共闘の必要性一

既述の通り、私たちは市民運動発足後、数年経て、鹿児島市にある「鹿児島で何ができるかを考える会」と川内市にある「川内原発建設反対連絡協議会」の二つの市民運動団体と連絡を取り、反戦・反核やその他の抗議集会の時、相互に会員たちを現地に派遣し、共闘したことがあった。しかし、団体の活動が未熟だったせいもあり共闘は不十分に終わってしまった。それから、十数年後だったか、この両団体は代表の死去により消滅してしまったことは大変惜しまれる。その後、私たちは単独で細々と運動を続け、二十数年経過した頃、マスコミで私たちの